

### 3. “在台2世” 文学者新垣宏一の見た徳島のモラエス

荒武達朗

#### はじめに

2015年に公開された映画「湾生回家」（黄銘正監督）は、久しく忘却されていた“湾生”という人びとに再び脚光を当てる契機となった。“湾生”とは日本統治時代の台湾に生まれ育ち、戦後日本へ引き揚げてきた一群の日本人を指す言葉である。台湾ではこの映画の原作者のスキャンダルも取り沙汰されたが、内容自体は概ね好意的な評価を得た。戦後の長い期間において日本統治下の台湾は“日抛時期”と称し不当な占拠と抑圧の時代と規定された。しかし1990年代以降は“日治時期”という表現に徐々に改められ、客観的に正負両面から当該時期を見直そうという風潮が主流となっている。一方かつての日本では台湾についての知識は限定的で、その独自の歴史・社会・文化に目を向けるどころか植民地支配の事実すらも忘却しつつあった。しかし近年、一部には単なる反韓・反中感情の裏返しの親台湾というポーズも見受けられるものの、全体として台湾への関心は高まりつつある。この潮流の中で『湾生回家』は日治時期から戦後、現在に至る湾生をめぐる人と人との交流を描いたものとして、日台双方の人びとに受け入れられたと言えるだろう。

現在この“湾生”（台湾生まれ、台湾育ち）という語彙は日本統治時代の台湾に生きた日本人を語る上でしばしば援用される表現となっている。言わんとするところは日本本土との間にある種の懸隔があり、植民地台湾への帰属意識を多少なりとも抱いている一群の日本人を指すものだろう。ただその原義に立ち返れば、当時の台湾で育った人びとを内地で生まれたか、台湾で生まれたかで区分するのが有効とは思われない。例えば同じ小学校の中には親の転勤の都合で幼少の頃に台湾に移り住んだ者もいれば、台湾で出生した者もいる。この両者を出生地で弁別することに特段の意味はなく、各人の性格の差異は物心がついた後に育った環境がより規定的である。“湾生”は現時点ではまだ認知度の高いシンボリックな表現であるので使用に差し支えはあるまい。しかしながらこの語彙の多用が植民地台湾へのノスタルジーや映画「湾生回家」の成功に附随したものであれば、その“賞味期限”は早晚切れるものとも感じられる。むしろ日本統治時代の日本人を弁別するに当たっては、「台湾で育った経験」を共有する2世代目を表す“在台2世”や“台湾2世”という概念でとらえた方が適切ではないだろうか。

さて徳島県を本籍とする“在台2世”の文学者・教育者に新垣宏一（にいがき こういち）という人物がいる。彼は1913年（大正2年）、日本統治時代の高雄に生まれた純然たる“湾生”である。彼は学生時代より多数の短歌、詩、小説、随筆を執筆するなど植民地台湾の文壇で一定の活動を行ってきた。戦後しばらくの間台湾に留用された後、本籍である徳島に引き揚げた。以降の彼は文学作品を執筆することはなく教育者・文学研究者として過ご

した。その最晩年の2002年に台湾で自伝『華麗島歲月』を刊行するにこぎつけたが、出版を待たず同年6月に逝去した<sup>(1)</sup>。そのタイトルの“華麗島”は台湾の意、全8章中7章までが在台時期の記述である。彼の事績と作品については日本と台湾双方の文学研究者が何本かの文章を著し分析を加えているが、専門的に扱った研究は少ない<sup>(2)</sup>。新垣は戦後に教育関係の著作を何冊か執筆している。しかし自身の文学作品をまとめた書籍を刊行していない。徳島県では教育者、文学研究者としての彼を記憶している人はいるだろう。だが徳島県立文学書道館の展示にも彼を紹介するコーナーは設けられていないので、彼が日本統治時代台湾の作家であった事実を知る人は殆どいないと思われる。

この状況をふまえ、小文は第1節において徳島県を本籍とする在台2世文学者、新垣宏一に対する認識を深めるために、彼の伝記並びに先行研究に基づき彼の履歴を紹介する。併せて第2節では先行研究がまだ採りあげていない在台時期の新垣とその故郷徳島との関係性に着目し、1935年(昭和10年)モラエス七回忌に端を発する新垣のモラエス研究の概要を考察することとする。

## 1. 新垣宏一の略歴

本節では新垣宏一の自伝『華麗島歲月』と先行研究に拠って台湾時代の彼の略歴を述べる。新垣は徳島県を本籍とし、1913年(大正2年)日本統治時代の高雄に生まれた。少年時代の彼は純粋な日本人町で育ち、台湾の人びととの交流は殆どなかった。1919年(大正8年)に高雄第一小学校、1927年(昭和2年)に高雄中学校に入学した。中学には成績優秀な台湾人の学生が在籍していたこともあり、この頃から現地の人びとに対する認識が深

---

(1) 新垣宏一著、張良・戴嘉玲訳『華麗島歲月』(台北)前衛出版社、2002年。新垣の娘、佐藤紫さんが清書し、それと中文訳を合わせて対訳形式で刊行したもの。写真、年譜、代表作を収録している。徳島県立図書館所蔵。また台湾時代を回顧したものとして新垣宏一『鄭津梁の日本見聞記』に寄せて(鄭津梁『鄭津梁の日本見聞記』徳島出版、1985年所収)及び新垣宏一「台湾時代」(「台北第一高女ものがたり」編集委員編『台北第一高女ものがたり』台北第一高等女学校同窓会みどり会、1999年所収)がある。

(2) この研究状況の総括は和泉司「在台2世の描く「台湾」と「台湾人」：新垣宏一「城門」を中心に」『跨境：日本語文学研究』1、2014年、大東和重「新垣宏一と本島人の台南：台湾の二世として台南で文学と向き合う」『外国語外国文化研究』(関西学院大学法学部外国語研究室)16、2014年などに拠った。和泉司は外に「日本統治期台湾文壇における「女誠扇綺譚」受容の行方」『芸文研究』(慶應義塾大学芸文会)83、2002年ならびに「新垣宏一「砂塵」論：「異文化を見る」という視点」『三田國文』38、2003年において新垣宏一の作品を扱っている。他に、林焮君「台湾の日本統治時代における芥川文学受容について：新垣宏一に即して」『芥川龍之介研究』12、2018年、台湾では林慧君「新垣宏一小説中的台湾人形象」『台湾文學學報』16、2010年がある。未刊行の博士論文であるが新垣のディアスポラ作家としての性格を分析した石川隆男『戦時下在台二世代日本作家之身分認同：新垣宏一的<流散>』輔仁大学、2020年があり、台湾国家図書館にて閲覧可能である。

まっていた。1931年（昭和6年）台北高等学校文科甲類に入学、文芸部に所属し小説などを執筆発表するようになった。そして1934年（昭和9年）に台北帝国大学文政学部文学科に進学した。

新垣の文芸活動はこの台北大学在学中に本格的に始まった。和泉司によれば1920年代初に台湾人によって始められた「台湾新文学運動」は、30年代になると日本語での活動が目立つようになった。在台日本人としては例外的に新垣はこの運動に関わっており、『台湾文芸』『台湾新文学』といった文芸同人誌に作品や投書を寄稿している。同じ頃、会津若松生まれだが台湾で育った西川満が台湾での文芸活動を活発に展開し、新垣にも大きな影響を与えた<sup>(3)</sup>。新垣の自伝によれば彼は西川の詩を「台湾風土のエキゾチズムの新世界」と高く評価し、「台大でもこの新勢力に抗する城を築くため」に『台大文学』という機関誌の発行に関わったという<sup>(4)</sup>。次節で検討する「徳島旅情」もまたこの『台大文学』に掲載されたものである。

1937年（昭和12年）に台北帝大卒業をした後、新垣は台南の台南第二高等女学校に国語科教師として赴任した。当時の台南には濱田隼雄、国分直一、前嶋信次らが各学校の教職にあつて文学活動を展開しており、新垣は彼らとも交流を深めた。また当時の新垣は佐藤春夫の台湾に関わる作品に心酔しており、その舞台となった地域の調査にも取り組んでいた<sup>(5)</sup>。河野龍也の研究に拠れば佐藤春夫は1920年（大正9年）7月より10月まで台湾及び福建に滞在、旅行し、その間の経験を基にして所謂「台湾もの」と称される作品群を著した。その代表作品である「女誠扇綺譚」には台南の街に関する描写が随所にあり、台南在住の文芸愛好家の中に熱心な探求者の一群を生み出した。河野は新垣をその探索に最も熱中した人物であると評している<sup>(6)</sup>。

新垣の赴任校は台湾人学生が中心であり、様々な階層の台湾人とふれあう中で、彼の「日本人としての二世意識が、無意識の『台湾人』に変わって」いったという<sup>(7)</sup>。この台南での生活は新垣に大きな刺激を与えた。この後、台湾社会の文化を積極的に調査を進め台南を舞台とした数多くの小説、随筆、詩を発表することとなる。

1941年（昭和16年）に新垣は台南を離れ台北州立第一高等女学校へと転任した。新垣の

---

(3) 前掲和泉司、2014年参照。西川満（1908年～1999年）は会津若松で生まれ、3歳の時に台湾に移り住んだ。在台湾日本人作家としては西川の方が遙かに注目を集めているが、彼は厳密な定義に従えば湾生ではない。

(4) 前掲新垣『華麗島歲月』2002年、39-40頁。

(5) 前掲新垣『華麗島歲月』2002年、55頁。

(6) 河野龍也『佐藤春夫と大正日本の感性：「物語」を超えて』鼎書房、2019年、第4章「『女誠扇綺譚』論：「物語」を超えて」、第10章「『女誠扇綺譚』と台南：世外民たちの横顔」。新垣宏一についての評価は同書、240頁参照。

(7) 前掲新垣『華麗島歲月』2002年、44-45頁。

小説は特にこの時期、台北に居を移して以降に数多く執筆されている。文末掲載の別表「新垣宏一在台湾時期（～1947年）主要作品」に彼が台湾時代に執筆した作品の主なものをまとめた。この中で、例えば「城門」（1942年1月）、「盛り場にて」（1942年4月）、「訂名」『文芸台湾』（1942年12月）、「砂塵」（1944年1月）はいずれも台南の台湾人社会を舞台としている。佐藤春夫の「台湾もの」に触発された台南での調査活動が、これらの作品の根底にあることは言うまでもない。加えて大東和重は執筆の背景・動機として西川満「赤嵌記」、庄司総一『陳夫人』の影響があり、これより台湾に根づいた文学を執筆するようになったと指摘する<sup>(8)</sup>。

一方、戦火が激しくなる1942年（昭和17年）頃から彼は皇民化教育に則った作品を発表するようになった。前出の「城門」（1942年1月）、「盛り場にて」（1942年4月）、「砂塵」（1944年1月）、並びに「船渠」（1944年11月）がその代表例である。これらの作品は日本統治下の植民地支配を賞賛する性格を強く帯びている。彼の愛国心に満ちた教育者という立場は否定できない。例えば学生たちを引率して日中戦争に赴く台湾人の軍夫を見送りに行ったという回想からもその一端を見ることができる。

「昭和十二年の七月に日中戦争が起こり、教師になりたての私にも、まじめな愛国思想がおきたのも当然のことでした。……。台湾人も皆、「日本人」なのだ。台湾人と「支那人」は、別の人間なのだと思います。」<sup>(9)</sup>

ここに見える新垣は日本の戦争遂行とそれに協力する帝国臣民としての台湾人に微塵の疑念も抱いていない。しかし一方で30年代後半から進行する皇民化運動について次のように述懐している。

「皇民化は台湾人を日本人に変えようとする政治教化体制であったと想像します。そして、それはある程度成功したと思いますが、台湾で生まれ育った内地人、ことに私のような本島人教育に生きた存在には、本島人側では内地人化するつもりであったのが、内地人少年が無意識のうちに台湾人化していったのではないかと、今日になって思うのです。私の作品『城門』『盛り場にて』『砂塵』などの台湾風景は、単に「皇民化」を主題としているものではないと思います。成長した台湾二世の心情的台湾化の生んだものです。」<sup>(10)</sup>

新垣自身は植民地台湾において戦意高揚の為の文章を積極的に著していた。これに対して如上の戦後の回顧は、その当時の彼の心境をそのまま表現したものとは言えまいが、台湾人を日本人と完全に一体視しようとしていたわけではなかったと主張する。「内地人少年が無意識のうちに台湾人化」していく日本人像は、日本統治時代末期の台湾社会で広く共有されたとは言い難い。ただ少なくとも在台2世作家新垣宏一のスタンスとして、台湾人

---

(8) 前掲大東和重、2014年。

(9) 前掲新垣『華麗島歲月』2002年、43頁。

(10) 前掲新垣『華麗島歲月』2002年、56-57頁。

の社会を理解し、それを叙述したいという欲求があったことは確かである。

1945年（昭和20年）の敗戦後の2年間、彼は教員として留用された。帰国直前に1947年（昭和22年）の二・二八事件を目撃している。彼は自伝において台湾人と進駐してきた国民政府双方に配慮した記述をしている。1947年5月に日本に引き揚げた後、徳島県の撫養高等女学校校長、徳島県教育研究所所長、穴吹高校、名西高校、富岡西高校の校長を勤め、1972年（昭和47年）に退職した。この間特に国語科教育に関わる教育論の著作を執筆している。退職後は四国女子大学（現、四国大学）で再び教職に就き、主に夏目漱石を中心とする文学史に関わる論文を数本著している。戦後の長い期間、新垣は小説などの作品を発表していない<sup>(11)</sup>。台湾人との交流は戦後も続いていたが、その詳細は不明な点が多い。台湾を戦後初めて再訪するのは1989年（平成元年）のことである。1998年（平成10年）8月、2000年（平成12年）より自伝『華麗島歳月』（2002年）のもとになる文章を台湾の『淡水牛津文芸』第7期、第8期に掲載した。その2年後、新垣宏一はその自伝が世に出る直前の2002年（平成14年）6月30日に逝去した。

## 2. 新垣宏一とモラエス研究

徳島に暮らした文学者ヴェンセスラウ・デ・モラエスについては数多くの研究・作品が刊行されているので紹介は無用だろう。その関連書籍の一つに新開宏樹『モラエスのとくしま散歩』出版カラムス、1975年という書籍がある。同書は“徳島市推薦図書”に指定され当時の山本潤造徳島市長筆の「『モラエスのとくしま散歩』をよろこぶ」という文を冒頭に掲載している。全体の構成は全60個の項目から成り、各項目の分量はそれぞれ1頁から3頁である。この内「散歩のはじめに」「モラエス略伝」「モラエス関係家図表」を除く57項がモラエスに関わる場所・事物を写真と解説文を附して紹介している。この書籍の著者は奥付には明示されておらず「新開宏樹 解説」と記されるのみである<sup>(12)</sup>。ただし序文「散歩のはじめに」にこの新開宏樹の名が記されており、全体の文体から判断するに彼が書籍全体の執筆者であると推測できる。もっとも本書の目次部分に添えられた「謝辞」からは14名にのぼる人びとに“指示談話、写真借用、編者参照”などの便宜を図ってもらった旨が記されているので<sup>(13)</sup>、モラエスの知人の談を聞き取り、先行する著述を整理し、その上で取材で得た情報を加えて執筆したものと位置づけられるだろう。

この新開宏樹は新垣宏一のペンネームであった<sup>(14)</sup>。本書の刊行に先だって新垣宏一がモ

---

(11) 前掲新垣『鄭津梁の日本見聞記』によせて1985年参照。

(12) 新開宏樹『モラエスのとくしま散歩』出版カラムス、1975年の奥付には「新開宏樹 解説」と記されている。

(13) この14名の人物は、斎藤益一、玉田ワキ、島田アサコ、木山富子、中山英一、松本進、久米惣七、佃実夫、花野富蔵、辻正、横山昭、福本博、岡本和夫、入江克也である。

(14) 前掲新垣『華麗島歳月』2002年、156頁。

ラエスについて記した文章はほとんどない。現在 Cinii Research (<https://cir.nii.ac.jp/>) や国会図書館の蔵書目録で確認できるものは、徳島県教育研究所所長時代に記した「モラエスの遺品の思い出」（1952年）と「モラエス遺品について」（1955年）の2本をあげられるのみである<sup>(15)</sup>。両者とも研究というよりは回想録、随筆という性格である。モラエス研究者としての新垣宏一は全く無名であるが、彼が晩年までモラエスなどの文学史研究に興味を寄せていたことはその回想より判明している<sup>(16)</sup>。この『モラエスのとくしま散歩』は彼が細々とライフワークとして続けてきた中で得た知見に基づく著作であると言えるだろう。

では在台2世作家であった新垣宏一はいつからモラエスに関心を寄せるようになったのだろうか。以下、彼とモラエスとの関わりについて、その端緒を考察したい。新垣宏一「モラエスの遺品の思い出」は次のような書き出しで始まる。

「昭和十年七月一日といえば今から十七年も前の話であるが徳島で盛大なモラエスの七回忌が催されたことを覚えている人も多いことであろう。古い話といえば古い話である。わたくしが文科の大学生で夏休のときの事であった。わたくしが台湾から何年に一度かの帰省をしたそのときはすでに七月中旬であったから、記念講演会などはすでにしていたが、佐藤春夫をはじめ、ポルトガルの公使などが来てよい会があったようである。」<sup>(17)</sup>

ここに記される“モラエスの七回忌”はこれまでの本プロジェクトの報告書でも論じられている通り、1935年（昭和10年）7月1日に大々的に開催され、県内外の名士、新居格、花野富蔵、佐藤春夫ら文学者が参列した。この七回忌を期に日本の知識人、文学者の間でのモラエスの認知度は高まったと言われている<sup>(18)</sup>。

このとき新垣宏一は台北帝国大学文政学部2年の学生であった。“何年かに一度の帰省”というように新垣の家は徳島の親戚との付き合いを保持していたようである<sup>(19)</sup>。7月中旬

---

(15) 新垣宏一「モラエスの遺品の思い出」『徳島文化』第4巻第2号、1952年。新垣宏一「モラエス遺品について」『徳島文化』第8巻第1号、1955年（同号は『モラエス案内』と題してモラエス翁生誕百年祭記念の特集号として刊行）。

(16) 前掲新垣「台湾時代」1998年、116頁。

(17) 新垣宏一「モラエスの遺品の思い出」『徳島文化』第4巻第2号、1952年。

(18) 佐藤征弥「モラエス七回忌法要の背景：顕彰、観光への期待、『日本精神』刊行の意味するもの」、河田和子「貴司山治におけるモラエスの影響：日本の文学者におけるモラエス受容」（以上本プロジェクト令和2年度報告書『異文化に照らし出された四国：グローバルな視点からの地域文化に関する文献調査から』2021年所収）、河田和子「戦前のモラエス受容における花野富蔵と佐藤春夫：日本の文学者におけるモラエス受容（2）」（同、令和3年度報告書所収）。ともに徳島大学附属図書館リポジトリで閲覧可能。

(19) 新垣宏一「徳島旅情」『台大文学』第1巻第4号、1936年、87頁によれば7年前と4年前に帰省していることが分かる。それ故、彼が日本内地から完全に切断された移住者であるとは考えられない。またこの関係があるからこそ、戦後の引き上げの後速やかに教育職に就くことができたと推測できる。

に徳島に帰着したためこの七回忌自体を目睹することはできなかったが、この後から新垣のモラエスについての探索が始まる。なお前述の通り後の台南時代（1937年～1941年）において、彼は佐藤春夫の「台湾もの」と称される作品群に傾倒し台南の町で調査を行うようになった。在台2世作家としての性格形成にとって佐藤春夫の影響は大きく、新垣は晩年までその作品に関心を寄せていた<sup>(20)</sup>。この台南時代に先立ち直接の邂逅はなかったにせよ佐藤との接点が1935年（昭和10年）のモラエス七回忌にもあった点は興味深い。新垣は「その頃の新聞をあれこれとスクラップしたり、いろいろな人にあつてモラエスの話を聞いてまわって、夏休を十分たのしく暮した」のであった。

「（光慶）図書館長は坂本さんで親切にモラエスのことについて研究の便宜を与えてくださった。モラエスだけでなく阿波国文庫中の源氏物語関係の文献を調べてくださるようにと植松安教授からの命を果たすために書庫の縦覧をも許していただいた。」

光慶図書館長の坂本さんとは坂本章三のこと、植松安は台北帝国大学で教鞭をとる国文学の教授である<sup>(21)</sup>。

「光慶図書館以外ではそれぞれの御紹介で、ある時は、田所眉東老人につれられて、潮音寺のモラエスの墓を訪ねたり、前田正一氏の案内では伊賀町のモラエス旧居を見たりした。」

新垣はこの間に前田正一や田所眉東というモラエスをよく知る人や郷土史研究家の助けを得てモラエスに関わる場所を参観し、知見を広げていたようである<sup>(22)</sup>。

この随筆を執筆するに当たり新垣は「わたくしのこの十七年前のノートを見」と、当時のフィールドノートを参考としていたことが分かる。これが戦後の新垣のモラエス研究を助けることになった。新垣はこのノートに基づき台北帝国大学時代に随筆「徳島旅情」を執筆した。これが新垣の最初のモラエスに関わる文章であった。

新垣宏一の随筆「徳島旅情」は全編14頁、彼が台北帝大在学時に創刊に関わった1936年刊行の『台大文学』第1巻第4号、86-99頁に掲載された。文末の【小記】に

「本年七月一日はモラエス翁八回忌に相当する。この文は作夏の旅の記である。早く一文を草して、徳島の人々の厚遇に謝するつもりであったが、早いもので又もやモラエス忌はめぐってきた。」

とある。“徳島の人々の厚遇”とは前述の通りモラエスについての調査で便宜を図ってくれた人びとを指すのだろう。その“厚遇”については後の「モラエスの遺品の思い出」「モラエス

---

(20) 前掲「台湾時代」1998年、116頁によれば、新垣は1990年（平成2年）に病床に伏してからも、夏目漱石、佐藤春夫、林芙美子、モラエスの文学史研究を続けていたという。

(21) 前掲新垣『美麗島歲月』2002年、33-34頁、41頁によれば近世、近代文学に興味関心を示していた新垣は植松の覚えがめでたくなかったという。

(22) 田所眉東は徳島の郷土史家として知られる。前田正一も郷土史研究者として知られ（佐藤征弥氏のご教示による）、三回忌以降、彼ら親しい者が中心となって法要を営んでいた。

遺品について」の方が詳しい。1935年（昭和10年）の徳島への帰省より1年が経った後に本文は執筆され『台大文学』に掲載された。

全体の構成は4つの部に分かれるが、節の小見出しなどはつけられていない。第1部分（86-87頁）は導入部分で徳島の風物、人びとの暮らし、そして夏の休暇に訪れた叔父の家での情景が描かれている。第2部分（87-94頁）はモラエスの略伝である。この部分は当時刊行されたモラエスの『日本精神』（1935年）、『おヨネと小春』（1936年）などを参考に執筆されたと考えられる<sup>(23)</sup>。この後半（93-94頁）では新垣が潮音寺にモラエスと福本ヨネ、斎藤小春の墓を訪ねた時の情景が描かれる。彼は短い休暇中合計3回同地を訪れたという。この時の郷土史家、田所眉東の案内についてのくだりは前述の戦後に著された「モラエスの遺品の思い出」（1952年）の記述とほぼ一致している。続く第3部分（94-97頁）の光慶図書館での資料調査は特に印象深かったようである。95-96頁では図書館で観覧したモラエスの遺品の収蔵品について、その貧相な様を強調している。この部分の記述は「モラエスの遺品の思い出」で“ノート”より引用した箇所と類似している。第4部分（97-99頁）はモラエスならびに「お米」と「小春」への追憶を徳島の盆踊りと絡めて叙情的に述べている。そして新垣は徳島の盆踊りが終わる頃、再び台湾へと戻っていった。彼の随筆「徳島旅情」はここで擱筆される。

では新垣宏一はなぜ生涯にわたってモラエスに興味を抱くことになったのか。「徳島旅情」をはじめ、彼の文章にはその動機が語られてはいない。だが全体を通せば、“文学者モラエス”に言及する箇所は少なく、かわって“徳島で暮らした外国人モラエス”という人物像に関心を寄せていたことが見える。新垣はそれを異郷における“不遇の”“もの悲しい”“うらさびしい”“貧相”“忘却された”という語彙で語っており、モラエスの流浪者、ディアスポラという性格に引き付けられていたと推測できる。第1節で述べたように新垣は台北大学在学期間中より台湾の独自の文学を創作することに熱意を持っていた。これは後に台南での教職時代を経て台湾社会への強い興味関心へとつながっていく。その異郷台湾での創作活動に従事する自らの姿を、新垣宏一はモラエスのそれに重ね合わせていたのかもしれない。

## おわりに

以上、新垣宏一の徳島でのモラエス研究という一つの側面を紹介した。文学史研究上の彼は、在台湾2世作家としてその台湾社会に対する理解と愛情、戦意高揚文学の担い手の一人、在台日本人としてのアイデンティティの所在という側面から議論されている。一方、戦後の彼については徳島の地域社会を除けば全く無名であったと言ってよい。自伝『美麗島歳月』などによれば台湾に対して一貫して深い関心と郷愁を抱いていたことは間違いない。しかし戦後、彼が台湾を再訪するのは1989年（平成元年）のことであり、日本の敗戦

---

(23) モラエス著/花野富蔵訳『日本精神』第一書房、1935年。モラエス著/花野富蔵訳『おヨネと小春』昭森社、1936年。略伝はこの「あとがき」を参照したと推測される。

より 1980 年代に至る期間の台湾との関わりについてはあまり語られていない<sup>(24)</sup>。その理由は定かではない。また戦後の新垣は文学的な創作をほとんど行っていない。彼は徳島県立教育研究所所長、県立高校の校長職にあり教育関係の著作を執筆する教育者、教育研究者としての性格が強い。退職後に四国女子大学教員となってからは近代文学関係の研究を進め数本の業績を残している。その間、形として残したものは主に夏目漱石に関する研究であるが、新垣は併行してモラエスに対しても関心をもっていた。ただしその専著は新開宏樹の筆名で 1975 年（昭和 50 年）に出版したガイドブック『モラエスのとくしま散歩』一冊であるため、モラエス研究者としての彼の認知度は一般的にはそれほど高くはない。

新垣のモラエスに対する関心はその著作ではなく、徳島での異境人としての暮らしに向けられていた。小文はその興味の端緒が台北大学在学中の 1935 年（昭和 10 年）夏、徳島への帰省にあったことを明らかにした。この年はモラエス七回忌にあたり佐藤春夫をはじめ何人かの文化人が参与し、徳島でのモラエスがにわかにも注目される契機となった。だが新垣自身は法要の半月後に帰徳しているためリアルタイムでその情報に接したわけではない。彼は休暇中の取材活動をもとにして「徳島旅情」という随筆を執筆、台北帝国大学の校内誌『台大文学』に発表したのであった。その後の彼は第 1 節で確認したように在台 2 世作家として台湾社会に関わる作品を数多く著すようになり、おそらくこの時期の彼にとってモラエスは少なくとも表面上興味の対象ではなくなった。なお先行研究が明らかにしているとおり新垣宏一は佐藤春夫の「台湾もの」に多大な影響を受けている。それ以外にもモラエスを通して何かさな“縁”があった点は興味深い。

彼を再びモラエスに引き合わせたのは 1945 年（昭和 20 年）の敗戦と 1947 年（昭和 22 年）の引き揚げである。帰郷の 5 年後、昔のフィールドノートを繙くことで再びモラエスへの興味がかき立てられたと考えられる。文献の調査と並行し、積極的にそのゆかりの土地を訪問する姿は、台南で各地の風土の調査に勤しんでいた彼のスタイルを彷彿とさせる。その点では 1975 年の『モラエスのとくしま散歩』は在台 2 世作家新垣宏一の延長上にあっただのと言えらるだろう。

---

(24) 黄得時の来訪、王育徳の台湾脱出は僅かに触れられるにとどまるが、例外的に鄭津梁とその子息の来日については詳細に述べられている。前掲新垣『美麗島歲月』2002 年、84-85 頁。前掲新垣『鄭津梁の日本見聞記』によせて 1985 年参照。

## 新垣宏一在台湾時期（～1947年）主要作品

※戦後期の研究論文などは省略している。また投稿・発言などの一部も割愛した。

※『華麗島歳月』所収の戴嘉玲「新垣宏一先生年譜初稿」並びに石川隆男『戦時下にみる二世作家のアイデンティティ：新垣宏一の〈ディアスポラ〉』埔仁大学、2020年を基に作成した。筆者による補訂・追記は斜体字で表している。

- 1931年 短編小説「でばあと開店」『台高新聞』？号（旧制台北高校）
- 1935年 新詩「葬式のあつたらしい夜」『第一線』（原載『先発部隊』第2号）  
小説「訣別（上）」『台湾文芸』第2巻第6号  
小説「訣別（中）」『台湾文芸』第2巻第7号  
新詩「切支丹詩集」『台湾文芸』第2巻第8, 9号  
投書「反省と志向」『台湾新文学』創刊号
- 1936年 新詩「玫瑰珠（ロザリヨ）」『台大文学』第1巻第1号  
評論「竹内眞氏著『芥川龍之介の研究』」『台大文学』第1巻第1号  
評論「『奉教人の死』に就て」『台大文学』第1巻第1号  
新詩「港にて」『台大文学』第1巻第3号  
**随筆「徳島旅情」『台大文学』第1巻第4号**  
新詩「さんた・くるず墓地」『台大文学』第1巻第6号
- 1937年 短歌「レントゲン撮影」『台大文学』第2巻第1号  
随筆「ポチとジョン」『台大文学』第2巻第2号  
散文詩「南蛮絵屏風」『媽祖』第13号（媽祖書房）
- 1938年 「台湾文学艸録（十七）～（二〇）佐藤春夫のこと」『台湾日報』11月1日～16日
- 1939年 随筆「台南で歿せる三代竹本大隅太夫」『台大文学』第4巻第4号  
「仏頭港記（一）～（六）文学的遺跡を尋ねて」『台湾日報』6月13日～22日  
「安平夜話」『台湾時報』10月号  
新詩「廢港」『華麗島』創刊号
- 1940年 「十夜の半弓」（井原西鶴文学に見られる探偵譚）『台湾警察時報』290号  
新詩「新樓午夜」『文芸台湾』創刊号  
前島信次・西川満・新垣宏一座談会「古都台南を語る」『文芸台湾』第1巻第2号  
「『女誠扇綺譚』と台南の町（一）～（六）」『台湾日報』4月27日～5月7日  
「邯鄲の夢について：国文学を中心として」『台湾警察時報』293号  
「ピエール・ロティと台湾」『台大文学』第5巻第1号  
随筆「花咲ける鳳凰木」『台湾時報』5月号  
評論「胡適のことなど」『台湾芸術』第1巻第5号  
「『女誠扇綺譚』：断想ひとつふたつ」『文芸台湾』第1巻第4号

- 「自像の辯」『台湾芸術』第1巻第6号  
 新詩「聖歌」『文芸台湾』第1巻第5号  
 随筆「台南通信」『文芸台湾』第1巻第6号  
 鞠子光一のペンネーム「阿片島綺譚」『台湾新聞』正月号（2等に入選）
- 1941年 「拝寵君公 台南の傳説より（下）」『台湾日日新報』5月2日  
 「台南地方民家の魔除けについて」『文芸台湾』第2巻第2号  
 「二世の文學」『台湾日日新報』6月17日、19日（日時確定は石川隆男、2020年による）  
 「台南の民俗傳説」『台湾地方行政』第7巻第7号  
 「薔薇園逍遙」『台湾芸術』第2巻第7号  
 随筆「鳳梨」『文芸台湾』第3巻第1号  
 随筆「露地の細道」『文芸台湾』第3巻第2号
- 1942年 小説「城門」『文芸台湾』第3巻第4号  
 小説「盛り場にて」『文芸台湾』第4巻第1号  
 随筆「支那譯について」『文芸台湾』第4巻第2号  
 随筆「培地の情趣」『台湾地方行政』第8巻第7号  
 新詩「ひよこ」『文芸台湾』第4巻第5号  
 新詩「ハワイ攻撃」「皇民」『文芸台湾』第5巻第2号  
 評論「国民詩片語」『文芸台湾』第5巻第2号  
 新詩「『秋の紅葉に照り映えて』：大東亜文學者大會出席者諸兄の帰北を迎えて」  
 小説「訂盟」ともに『文芸台湾』第5巻第3号
- 1943年 新詩「歌仔戲」及び随筆「あやつり人形」「盛り場」「台湾の蝶」「洗濯」「鹿」「龍骨車」を  
 西川満編『台湾繪本』東亞旅行社臺北支社に掲載  
 新詩「からすみのうた」『文芸台湾』第5巻第4号  
 河野慶彦・大河原光廣・日野原康史・新垣宏一「台南地方文学座談会」『文芸台湾』第5巻第5号  
 小説「山の火」『文芸台湾』第5巻第6号  
 随筆「閑話」『台湾芸術』第4巻第4号  
 随筆「駱駝のはなし」『台湾地方行政』第9巻第4号  
 小説「陀佛靈多」『台湾鉄道』第370号  
 小説「若い水兵」『文芸台湾』第6巻第2号  
 「 Deng 熱のこと」『台湾鉄道』第372号（第2回文芸台湾賞獲得）  
 「高砂義勇隊」『婦人画報』第37巻第8号  
 随筆「大隅太夫に就て」『台湾公論』8月号  
 「上海の妹に」『台湾芸術』第4巻第12号  
 「西鶴と瀬川菊之丞」西鶴学会『西鶴研究』第4冊、台湾三省堂
- 1944年 「『台湾決戦文學會議』：本島文学決戦態勢の確立・文學者の戦争協力」発言『文芸台湾』終刊号

- 評論「日本文學の傳承（われわれの主張）」『文芸台湾』終刊号  
小説「砂塵」『文芸台湾』終刊号  
小説「朝晴れ」『台湾芸術』第5卷第3号  
「芭蕉について」『台湾芸術』第5卷第6号  
評論「台湾一家の結束（台湾文學者の蹶起）」「森鷗外」『台湾文芸』第1卷第2号  
「健兵の母よ斯くあれ」『新建設』7月号  
「鐵量（派遣作家の感想）」『台湾文芸』第1卷第4号  
隨筆「洋鬼談義（上）（下）」『台湾新報』9月8日、9日  
「布袋草」『旬刊台新』第1卷第9号  
小説「船渠」『台湾文芸』第1卷第5号  
評論「『三四郎』の時代：夏目漱石についてのノート」  
短編小説「醜敵」『台湾文芸』第1卷第6号  
小説「此の手、此の足」『旬刊台新』第1卷第16号  
1945年 小説「いとなみ」『台湾文芸』第2卷第1号  
隨筆「忍術」『台湾新報』3月19日